HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道スピリッツ，あれやこれや
Author(s)	桜木，紫乃
Description	講演
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報，12，3-6
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89046
Type	departmental bulletin paper
File Information	REBN_12_003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域経済経営ネットワーク研究センター年報　第 12 号
北海道大学　2023. 3

＜講　演＞

北海道スピリッツ，あれやこれや

桜木　紫乃
作家

桜木紫乃と申します。北海道に生まれて暮らして 57 年，ただの一度も北海道から出て暮らしたことはないです。

今日は，北海道に暮らすメリット・デメリット，北海道で働き，暮らすことについてのお話ということです。私は，実を言うと，この 57 年北海道に暮らして，ただの一度も不便を感じたことがないのです。小説を書く時に北海道を舞台に書くことが多いものですから，今まで住んだ場所，釧路，網走，留萌，そして今江別にいるのですが，何となくそれらの場所を思い浮かべていただくと分かると思うのですが，本当に直角移動しています。それも，うちの亭主の転勤先についていっただけの話なのですけれども，おかげで北海道にもいろいろあるのだなということが分かりました。

小説家になって不便だったことというのは，強いて言えばですが，東京に行くと 3 日もいられないのです。人の動きが速くて，道行く人がみんな私に向かって歩いてきているような気がして，とにかくぶつかるのです。東京に長くいられなく，新刊が出る時には 3 日の間に全部取材を入れてもらいます。新刊のプロモーションとか取材とか入るのですが，その 3 日間の中に入りきれなかったスケジュールは，媒体の方にはすみません残念でしたということになるのです。それは担当が大変そうだなとは思っていましたが，何とここにきてリモートという技が生まれ，なぜか私忙しくなってしまったのです。取材に随分時間を取られることになってしまったのです。今までは，3 日間のうちのどこかのコマを使って 1 時間くださいなんて言われ，担当が「はい，分かりました。何とかフィックスします」と，私の知らない言葉を使っていました。ここ数年，そのフィックスが，できないということがなくなってしまいました。ありがたいことに，しょっちゅう取材が入ってくる。それで，媒体にいつも同じ写真が貼られてインタビュー記事が載ると，「お忙しいのでしょう」と。忙しいことは忙しいのですが，全部家の中でというか，仕事場でできる仕事の幅がちょっと広がり，忙しくなったという感じに最近なっています。

新人賞をいただいてから，ちょうど今年で 20 年たちますが，子供を産んでから始めたことだったので，ずっと家族に差し支えのないところで仕事をやってきました。書くことが割と当たり前になってしまい，その書く動機も後づけのような感じになってきて，今ではあまりいろいろ思い出すこともできないのですけれども，好きでないと続けられなかったなと思う場面は何度か経験しています。

何も知らない頃，「オール讀物」という雑誌の新人賞をもらいました。そこに 1 週間に 1 本ずつ短編を送っていたのです。いくら送っても返事が来ないので，これは今回ボツなのだなと思い，次の週にもう 1 本送り，それで，連絡が来ないのでずっと送り続けて，2 年ぐらいたってようやく 1 本載るか載らないか，という状況でした。そんなことをやっていたら担当がやたら替わるので，この人はもうもたないから，どんどん担当が替われば諦めるだろうと思われて

いたようです。

何を自慢話してるんだっていう話ですね。私は踏ん張ったので20年続けていますという話なのです。

この間，岐阜に行ってきました。キムタクが「ぎふ信長まつり」に来る1週間前でした。そこで，中学生・高校生30人弱ぐらいを相手に小説の話をしてきたのですが，信長ゆかりの地なので，私の鉄板ネタの「私，北海道から出てきたので」という話をしました。北海道から出てきたので，屋号とか家紋とか，本家とか分家って「犬神家の一族」でしか知らないんですよね，と言ったら，大概の人は笑ってくれるのに，誰も笑わないのです。何でかなと思ったら，若過ぎて「犬神家の一族」のお話を知らなかったのです。

ちょっとショックでしたが，屋号というのも知らなければ家紋も分からないのですと言ったときに，愛知の子供たちはのけぞって，びっくりしていました。やっぱり信長の里，光秀が上り下りして，道三が亡くなった場所，そういうのが身近にある若い子たちは，先祖とか，しきたりとか，そういうことが当たり前になっていて，いかに私がよりどころなく57年生きてきたかがよく分かる気がしました。ただ，そのよりどころのなさというのは，50歳を過ぎたから言えることですが，自分を優先できる軽やかさに繋がったのかなと思います。

北海道というのは名前とか生まれに頼らずに生きていけるいい土地だなと，岐阜城に上って思いました。岐阜城に登るのは大変でした。ロープウェイで山頂まで上がって，またさらに徒歩で上らなければいけない。あそこを上がったり下りたり毎日やっていた光秀は，謀反を起こしたくもなるわなと思いました。(笑)

やはり，名前自体が重くないというのはありがたいことだなと思います。おかげであまり周りのことに左右されず，自分が持って生まれたものに忠実であれたことは私にはとてもありがたいことでした。あまり他人に興味がなく，テレビもあまり見ないものですから失敗もあります。前述の岐阜にいたときの話なのですが，文化人が150人ぐらい集まってやる文化戦略会議，エンジン01というのに入っています。その会合で，会食をしていたら，私の前には女優さんがいて，ちょっと離れたところに一人でぽつんといる男性がいて，何か寂しそうだなと思い，20代ぐらいに見えたので「僕，ちょっとおいで。こっちで一緒に食べましょう」と言って，名刺交換をしたら，落合陽一[1]さんだったのです。(笑) 私は，落合陽一さんを知らなくて「落合陽一って，何か有名人いたよね」と言ったら「それ，僕じゃないですよ」と言われて，「じゃあどこの落合さんですか？」と言ったら，向かいにいた女優さんが「桜木さん，落合信彦[2]さんの息子さんですよ」，「あーっ」という感じです。おやじとムスコの区別もつかない。いかに物を知らないか。これは，北海道しか知らないからとかそういう問題ではないですね。これが「岐阜の落合陽一事件」と呼ばれています。(笑)

あと，自分は北海道にずっと住んでいてそれ以外を知らないものですから，「北海道のあたりまえ」を原稿に書いて担当に驚かれたことは結構あります。結婚式は会費制，お香典には領収書が出るというのは北海道の方は不思議じゃないですよね。それがほかの土地にはないことだと聞いて，私のほうがびっくりしました。北海道以外の土地を北海道人は「内地」と言いますが，北海道の人間の当たり前は「内地」の当たり前ではないということに気がついたのが大体10年ぐらい前です。

---

1) メディアアーティスト。1987年生まれ，東京大学大学院学際情報学府博士課程修了（学際情報学府初の早期修了），博士（学際情報学）。筑波大学デジタルネイチャー開発研究センター センター長，准教授・JST CREST xDiversity プロジェクト研究代表。落合陽一公式 web サイトより https://yoichiochiai.com/

2) 国際的ジャーナリスト。著書多数。

『ラブレス』[3] というお話を書いたことがあり，北海道に行って石を投げたらこんなおばちゃんに必ず当たるだろう，身内に必ず一人はいるはずだという，ちょっと我が道を行くタイプのおばちゃんの話を書いたのです。それを書いたときに，こんな地味な話は本にはならないだろう，でも書けてよかった，私には当たり前なことですが書きたいと思っていたことを書けてたしと思っていたら，何かちょっと話題になりました。自慢になってしまいますが，吉川英治新人賞，大藪春彦賞，直木賞にノミネートされました。賞レースはどれも落ちていたのですが，あれを書いた頃から，自分は外国から何かを発信しているのだという気持ちでいれば，まあ間違いはないかなと思うようになりました。そのほうが，あっさりと「内地」のルールに取り込まれずに済む。自分の当たり前を書くということは，土地と人を肯定することではないかと思います。肯定というのは，小説の担う大きな仕事だと思っています。

私は現在，北海道新聞文学賞の選考委員をやっていますが，今年の受賞者はアイルランド在住の方でした。北海道出身なので，応募資格があるわけです。内容は，1 行で終わるのです。夫を寝取られた女の話です。どこの国に生まれても，人間は人間のすることをするのだなということです。キャシーとかアンとか出てきますが，描かれているのは人間のよりどころのなさということでした。おのれ一人というプライドの在りかについては北海道に生まれた人のものだなと私は思いました。私と李恢成先生が激推しで受賞されたのですが，賞金 100 万円は，アイルランドからの交通費のほうが高いそうです。

私の今日のお話は，北海道に限らず自分が生まれた土地の当たり前を肯定できたら，人として少しは強くなれるのではないかと思うという話です。

3）2013.12 新潮文庫。

そして，おまけなのですが，今年一番自分でいい仕事をしたなと思ったのは『中島みゆき詩集』[4] の巻末エッセイを書かせてもらったことなのです。最初これを，自分で読もうかなと思いましたが，せっかくプロがいるので，斎藤歩さんにノーギャラで朗読していただけたらとお願いしたいなと思います。よろしくお願いします。（拍手）

斎藤：では，失礼して。これ初見ですから，間違って読んだりしたらごめんなさい。

エッセイ「メロディのある文学作品」

桜木紫乃

ひとりでラジオを聴くことを覚えたころにはもう，中島みゆきは中島みゆきだった。

こちらが十代の初めには既に〈時代〉を歌っていて，その内容の大きさが分からぬ田舎の少年少女たちも「ひとはそれでも生きてゆく」ことを，知らず知らずのうちに彼女の歌から学んだ。

＜中略＞

百年前に「核家族」から始まった北海道の家族関係について，「ドライ」「じめじめしている」とまったく逆の表現をされることがある。どちらも間違ってはいないのだろう。血縁にほとんど期待せずに生まれ育つと，内地にはあって北海道にはないものや価値観の違いに気づく日がくる。なにせ私たちは，血縁を断ってしょっぱい河を渡ってきた人間の子孫なのだ。

おおよそ家柄や格式，祖先が某という付加価値から遠いところにいる人間が何を考えるかというと，「自分」のかたちだ。自慢できる家も家系もない。体ひとつとそれを覆う服一枚という精神的な身軽さは，百年の時を使いこの国が求めてきた価値観からずれた。

＜中略＞

4）『にほんの詩集 中島みゆき詩集』2022.4　角川春樹事務所。

北海道の人間は，雪が降っても傘を差さない。靴の底できしむ雪の音を聞いて育ったので，容易に解けないことが分かっているのだ。だから自分の体温も出会う人の体温も，心の底からは信じないのが北の礼儀。「素っ気ない」と「水くさい」は，手前勝手に枝を伸ばしながら生きてきた私たちにとっての褒め言葉だろう。

この土地が課した「自由」の本質に気づいた人が書く詩は，人と上手く付き合う術を学べなかった寄る辺ない人間の負い目に溢れている。孤独のかたちを凝縮した詩は，観察と内省に遠慮がないのでこちらも遠慮なく聴くし，読む。

彼女と私にひとつだけ共通点があるとすれば「北海道に生まれた人間が育てた最初の世代である」ということ。三代続かないと江戸っ子ではないというから，好む好まないにかかわらず，私たちは生粋の北海道人なのだろう。

ありがとうございました。（拍手）私は今日こんなことを言いたかったわけです。

歩さん，ありがとうございます。やっぱりプロっていいですね。自分で読むことを放棄してよかったなと。

今日は，どうもありがとうございます。（拍手）